

## ウーフの読まれ方

——大人の読みと子どももの読み——

高 橋 久 子

### 《問題の所在》

一九六九年、神沢利子がポプラ社から出版した『くまの子ウーフ』<sup>①</sup>は、戦後日本の幼年童話の一つの成果として高く評価された。前年に出版された『いたずらラッコのロッコ』<sup>②</sup>と並べて、古俣裕介は「翻訳の分かりやすさと子供達の抱く素朴な疑問に丁寧に対応している」ことが、一般読者の深い共感を得たとみている。神宮輝夫も「基本的な幼児らしい疑問を出しながら書いていますね」と、同様な指摘をしている。また、原昌は「幼児子供の新鮮なおどろきの感覚に満ちている」ことと、「幼児子どものもっているアニメイズム性とその同化性」とを、幼年童話のなかでくり広げる」こと、そして「幼児特有の論理思考が宿されていること」「言葉のリズムと言葉の遊戯とをしばしば試みていること」「空想の豊かさ」「やさしさ」の六点を選び、この六点がそのまま「幼児の心性への接近であった」と書いている。こうした研究者の論説を持ち出す必要もないほど「くまの子ウーフ」に関する評価の焦点は絞られたものであり、それはひとことでは「ありのままの子どもを表現している」ということとであった。こうした捉え方は、一九六十年代の必然ではあったと

思う。それまでの観念的抽象的意味から離れ、子どもたちが実際におもしろがつて読む作品、ありのままの子どもを生き生きと描いた作品、という時代の要求を引き受けたかたちとなった。

しかし、その一方で私は、幼年童話の場合、子どもがおもしろがつて読むありのままの子どもを生き生きと描いているという図式は必ずしもあてはまらないのではないかと思っている。「ありのまま」「幼児の心性」という概念は、大人の側のものであるからだ。作り手の側にあっても、「こういう子であってほしい」「こんなふう幼年時代を過ごしてほしい」という大人としての「よく生きてほしい」願望が、登場人物のキャラクターや行動原理を貫いている場合が少なくない。

具体的に『くまの子ウーフ』の話を進めよう。

私は、子どもたちと一対一で絵本や物語を読みあう機会をもってはいるのだが、『くまの子ウーフ』の中の「ウーフはおしっこでできているか?」を読むと、ラストシーン

「ねえ、おかあさん、ほく、わかったよ。ほくね、なんでできてるかといえね」ウーフは、うれしそうにいました。「ほくで

できてるの！ウーフは、ウーフでできてるんだよ。ね、おとうさん、そうでしょう」

に至って、その前のシーンまでの子どもたちの好奇心がストンと落ちる感じがするのだ。ところが、大人になってこの作品を読んだ人達は、逆に「ぼくはぼくでできている」という抽象化されたことばの真実に深く共鳴するようだ。多分それは、アイデンティティを捜し求める混沌とした旅に道筋をつけてくれる「整理されたことば」であるからだろう。しかし、子どもにとってこのことばは、経験を素通りにした「情報」にすり替えられてしまふ危うさをばらんでいるような気がしてならない。ウーフは、幼年期の子どもが無秩序に世界にほうり出され、自分の行動を選択しながら、快感と苦痛と好奇心と恐怖心と、いろんな本能を鍛えていく「自分づくり」をウーフ流のやり方で重ねていく。その「自分づくり」は、ウーフの中に人生に於ける「抵抗の拠点」としてウーフの自立した歩みを支え続けていくだろう。しかし、この「ウーフ流自分づくり」が、外からの期待によって「情報」として押し込められた瞬間、子ども読者は「良い子の物語」に管理され始める。実際の読みあいの現場で子どもたちの中に感じられたラストシーンへのとまどいは、もしかしたら、そこへの無意識の抵抗だったのかもしれない。

やや異なったアプローチをしているものの、杉原美香も、多くの論者たちがウーフの発想を子ども一般のものとしているが、実は、ウーフ独特の発想であり、読者である子どもは、その独特の発想に読むという行為によって同化できるのだ、と指摘している。私に言わせれば、「読みによって同化する」という行為の中に、神沢利子

という一人の大人の「健全な人間に育ってほしい」という理念がどう注ぎ込まれていくのが、さらに問題であろう。

杉原は論説の根拠として、小学三年生を対象に、二年生の時に教科書で学習した「ウーフはおしっこでできているか？」の感想文を書かせ、その内容を分類・分析した結果を用いている。そして「子どもはウーフを自己領域にない『他者』と認識している」とも述べている。しかし、このやり方では、二年時の教材としての取り扱われ方（教師の影響）が子どもの認識を左右している可能性は大きいし、感想文という方法では、十分に子どもの心情を引き出せないのではないかという疑問も残る。

今回の研究では、読みの現場で直感された「ウーフの体験によって積み上げられてきたことばの世界が最後のシーンで外からの（大人側からの）情報化されたことばにすり替えられてしまったのではないか」という仮説を実証するため、子ども一人ずつの興味心情がラスト部分でどちらの方向を向いているのか、自由記述によるおはなしづくりとインタビューによって確かめることにした。事前に断っておきたいことは、子どもの予測する方向へ物語が進むことが良いと考えているわけではないことだ。むしろ、作品のおもしろさとは、この予測がくつがえされることによって生じる読みのダイナミズムにもある。問題は、そのくつがえし方にあるのだ。

### 《手続き》

#### 一、調査対象

・子ども読んだことない群 四十名

(小学二年生、『ウーフはおしっこでできているか??』を  
読んだことがない)

・子ども読んだことある群 三名

(小学二年生、『ウーフはおしっこでできているか??』を  
読んだことがある)

・大人読んだことない群 十五名

(短大二年生、『ウーフはおしっこでできているか??』を  
読んだことがない)

・大人読んだことある群 三名

(短大二年生、『ウーフはおしっこでできているか??』を  
読んだことがある)

子ども、大人共に、読んだことある群の人数が少ないが、教室での調査であったために、人数の分配ができなかったこともあるが、今回は、読んだことのない者たちの「読み」の全体像を探る事が主たる目的で、実験群と統制群に仕立てて、反応の統計的比較処理を行なうようなことはしないため、このまま進めることにした。

## 二、調査日

・一九九八年十月二十七日(子ども群)

↓小野田市立高泊小学校二年生全員

・一九九八年十月二十八日(大人群)

↓梅光女学院短大二年生高橋ゼミ全員

## 三、手続き

・まず、クラスごとに(小学生は二クラス、短大生はゼミクラスで)「ウーフはおしっこでできているか??」を、ラストシーンの直前まで(「ころころころころころころころころずっしん!」まで)読み聞かせる。そこで読みを中断し、紙を配る。「さあ、このあとウーフはどうなっちゃったろうね。どんなおはなしが続くのかな。こうなんじゃないのかな、と思うとおりに書いてください。前に読んだことのある人も、今あなたが思うとおりに、自由におはなしをつくってください。ことはで書きにくいと思う人は絵で描いてみせてくれてもいいです。」と、なるべく国語の授業の展開というような窮屈な印象を持たないように声をかけた。

・右の導入の結果、子ども読んだことのない群四十名のうち、文と絵の両方で答えた子が二十八名、絵のみで答えた子が二名、文のみで答えた子が十名だった。読んだことある群三名中文と絵両方で答えた子が二名、文だけの子が一名だった。一方短大生は読んだことない群三十名のうち文と絵両方で答えた子六名、文だけの子が二十四名、読んだことある群は、三名とも文だけで答えていた。

・絵のみで答えた子には、それがどんな場面でどんな絵であるのか、補足インタビューした。

・次に、全員のおはなしづくりが完了するのを待って、「それでは、このものがたりを書いた神沢利子さんは、どんなふうにおはなしの続きをつくったか、読んでみようか」と

誘いかけた。すると、全員がこの誘いかけに強い興味を示した。このことよって、ものがたりの読みが通常と異なり、途中で中断したことデメリットは、ある程度解消されたと考ええる。そこで、作品のラスト部分を読み、一人ずつの反応を観察した。

### 《結果の分析》

回収した「続きのおはなし」の中から、次の十要素を取り出し、その出現率を出すことにした。

H……………家に帰る。家の存在が示される。

M……………母親の登場

F……………父親の登場

Ns……………新たな場所の出現

Np……………新たな登場人物の出現（新しい出会い）

Op……………既に出て来た両親以外の登場人物との再会（メンドリ、

キツネのツネタ）

Wi……………ウーフが、自分が何でできているのか考える（ストーリーに出て来た範囲で）

Wie……………ウーフが、自分が何でできているのか考える（ストーリーに出て来た情報以外で。特に「ぼくはぼくできている」という発想には\*）

Wo……………ウーフが自分以外の者が何でできているのか考える（ストーリーに出て来た範囲で）

Woe……………ウーフが自分以外の者が何でできているのか考える

（ストーリーに出て来た情報以外で）

なぜこの十要素を取り出したかという点、本テクストのラスト場面前まで（調査で読み進めた部分までのストーリー）の構成がH・M・F・Ns・NP・Wi・Woの七要素によるものと考えられたからである。ストーリーの結末部分では、①これら既存の要素がどのくらいでてくるか、②新たにどのような場所が想像され（Ns）新たにどのような登場人物が加わり（Np）、ウーフの自己洞察がどのように深まり（Wie）、ウーフの他己洞察（I）は何でできているのか）がどのように深まるか、このふたつの大きな指標を立てて、読者が物語をどのように収束させていこうとするのか、読みの側の期待を探ることにした。恐らく「おもしろい作品」「読者をひきつけて離さない作品」というのは、こうしたストーリーへの期待をいかに鮮やかに裏切るか、に神経を払った作品であろう。また逆に読者の想像し得る結末を用意するということは、（ああやつぱりねえ）というような一種の安堵感を与えるか、（なあんだ、やつぱりそうか、つまんない）という軽い失意と結び付くか、どちらかであろう。たとえば、松谷みよ子の赤ちゃん絵本『いないいないばあ』を思い出してみるとよいだろう。「くまちゃんがほらね、いない、いない」（一）「ばあ」（二）と、見開き二場面を使って、一、二、一、二、と二拍子で展開されていたストーリーが、ラストは、見開き一場面だけで、左右に「こうちゃんがほらね、いないいないばあ」が描かれる。このため、それまでの、めぐりによる二拍子の展開のおもしろさが半減し、（なあんだ、これでおしまいか）と読者に予

感させる。これは、あえて読者の好奇心を静め、ストーリーの後始末をしようとする計らいであったとされる。

さて、神沢利子が考えた「ウーフはおしっこでできているか?」の結末は、どんな展開になっていたか。家に転がり戻って、おとうさんとおかあさんに「ぼくはぼくできています」と自分の発見をことばにして告げる訳であるから、先に設定した十要素でいえば、H、M、F、Wieということになろう。

これに対し、読者のストーリーへの期待は、いかがなものであったか。表一―五を参照されたい。まず、この作品を読んだことのある子ども、大人たちにとって、神沢が用意した結末が印象的で強く心に残っている場合は、先に示したH、M、F、Wieの出現率が、読んだことのない群より際立って多くなる事が予測される。しかし、

実際は、ほとんど、差がなかった。特に、「ぼくはぼくできています」という発展的な自己認識概念、批評家たちに評価されてきた概念については、大人、子どもに関係なく、全く記憶に温存されていなかった。これは、もちろん、読んだことのある対象者が少なかったせいもあるが、彼らにとってさほど印象的な結末でなかったことは確

表1 <子ども・読んだことない群>

子ども No.	要素(出現順)	絵の有無	子ども No.	要素(出現順)	絵の有無
1	H、M、Wo、Ns		21	Op	絵あり
2	H、M、Woe		22	Np	絵あり
3	M、Np、H、Wi	絵あり	23	H、M	絵あり
4	H	絵あり	24	M、H	絵あり
5	H、M、F、Ns	絵あり	25	Ns	絵のみ
6	Ns、M、H	絵あり	26	Ns	絵のみ
7	Ns	絵あり	27	Op、Wi、Woe	絵あり
8	H、M、Wi、Wo		28	H	絵あり
9	H、M、Np	絵あり	29	H、Op	絵あり
10	H、M、F	絵あり	30	Np、H、M、Ns	絵あり
11	H、Op、Wi、F	絵あり	31	該当要素出現なし	
12	Np	絵あり	32	Ns、Np	
13	H		33	Op	絵あり
14	H		34	Np	絵あり
15	Op、Wi		35	H、M	絵あり
16	Wie、Op	絵あり	36	Woe	絵あり
17	H、M		37	Ns	絵あり
18	Np、Ns	絵あり	38	H、M	絵あり
19	Wie	絵あり	39	M	絵あり
20	Op		40	M、Np	絵あり

表2 <子ども・読んだことある群>

子ども No.	要素(出現順)	絵の有無
1	H、Woe	絵あり
2	Ns、F	絵あり
3	H、M、Wi、Wie、F、Ns、Woe	

かなようだ。

次に、この作品を読んだことのない子どもたちにとって、未部分の想像に積極的に用いられた要素を拾ってみると、

・家に帰る(H) / 母親と再会する(M) / 新しい場所へ行く(N) / 新しい登場人物に会う(NP) / 古い登場人物に再会する(O)

表3 <大人・読んだことない群>

大人 No.	要素	絵の有無
1	M, F, Wi	
2	Np, Woe, F, H, Wie*	
3	H, Wi, Wie, M, F	
4	M	
5	H, Wi, M, F, Woe	
6	H, M, Wi	
7		
8	H, M, Wie, F	絵あり
9	M, H	絵あり
10	Np, Wi, Wie	絵あり
11	H	絵あり
12	M, Wie, Wi	絵あり
13	H, M, Wie, Woe	
14	F, Wi, Wie, M	絵あり
15	F, Wi, H, M	

表4 <大人・読んだことある群>

大人 No.	要素	絵の有無
1	M, Wi	
2	M	
3	H, M, Wi	

p)

の五要素であった。自分が何でできているのか、という命題については、彼らの心の中では、ラスト部分の前、「ぼくのからだからでるのは、おしっこだけじゃないや。ちもでるし、なみだもでるよ。ツネタなんかうそつきだ」というウーフの発言で、完結してしまっているようだ。ほとんどの子が、この命題をラストまでひきずっていないかった。回答の中に、母親に今日あったことを報告するという形式を除けば、ラストに至るまで「考えるウーフ」は出現しなかった。

一方、読んだことのある子ども群が、読んだことのない子ども群と際立って異なっていた部分は、新しい登場人物との出会い(NP)、古い登場人物との再会(OP)というような、ものがたりの新なる

盛り上がりを作ろうとする試みが全くなかったことであろう。

次に、大人の読んだことのない群の特徴を見てみると、半数近くを占めていたのは、H、M、F、Wi、Wie、つまり、神沢の用意した結末とほぼ一致する。読んだことのある群も、際立った違いは

表5 群別、各要素出現率

要素	子ども読んだことない群	子ども読んだことある群	大人読んだことない群	大人読んだことある群
H	20/40	2/3	8/15	1/3
M	16/40	1/3	11/15	3/3
F	3/40	2/3	6/15	0
Ns	10/40	2/3	0	0
Np	9/40	0	2/15	0
Op	8/40	0	0	0
Wi	5/40	1/3	8/15	2/3
Wie	2/40	1/3	7/15*1	0
Wo	2/40	0	0	0
Woe	3/40	2/3	3/15	0

なかつた。ということは、まとめると、こういうことにならうか。子どもの場合は、中盤までのストーリーのおもしろさに高揚した気持ちだが、そのままさらに新しく展開するようなストーリーを導き出す。ただ、高揚のあとの休息の場として「家」、「母親」の存在が用意されている場合が多かつた。中には、いったん家に帰って休息して再び出て行く(例 子どもNO.①)というものもあつた。大人にとつて、結末とは、エネルギーの収束して行く場所として意識され、これまで以上の新しいストーリーの起伏より、「ウーフは家に戻り、両親に向かつて今日発見したこと(自分は何でできているか)という命題への答えを告げる」ことで終わらうとする。これは、神沢利子のもくろみとも合致した。

では、このような子どもの結末部の予測と、実際の結末とのずれは、本作品において、意外性として子どもを魅了するものであつたのか、安堵感を与えるものであつたのか、調査の続きを述べなければならぬ。

全員が結末について回答し終わると(子どものうち、一名は、何か感じている様子ではあつたが、絵でも文でも、その後の個別インタビューでも回答は得られなかつた)、手続きの所で示したとおり、「では、このおはなしをつくつた人、神沢利子さんといいますが、神沢利子さんが考えたこのおはなしの最後はどんなだつたかおはなししましょう。」の呼びかけで、続きをよんだ。子どもたちは、かたずをのんで、ものがたりの行方を見守つた。

さて、「ほくね、なんでできてるかといえね」「ほくでできてるの!ウーフは、ウーフでできてるんだよ。」の箇所を読むと、何人

ウーフの読まれ方 —— 大人の読みと子どもの読み ——

かの子が「へえー」「がっちょーん」「なんだあ」「しゃれにならん」と、声をあげた。何か期待していたものと違う、肩透かしを食らわされたような声であつた。先に自由創作をし、余りに愉快に楽しく想像を膨らませていたために、「ほくはおしつこでできているんじゃない。いろんなものでできているんだ。」という、既に出て来たウーフの自己発見の焼き直しに過ぎない「ほくでできてるの!」ということばが、子どもたちの心にはさほど新鮮に届かなかつたのではない。しかししたら、今回の調査の場の設定の仕方や、導入の仕方、読み方等が違つていたら、もつと盛り上がりが見られたのかもしれない。しかし、一、二年生という、本作品の読者対象を考えると、やはり、結末部の「ほくでできてるの!」は、抽象度が高すぎて、共感が難しいように思う。

井上一郎は、「子供の世界の表現論」の中で、ここでのウーフの認識を「『ウーフはウーフでできている』というトートロジーの中に今まで述べてきたような人間についての様々な観点、つまり△モノ√・△イキモノ√・△人間√という視点から見えるもの全てを含めた自己確認の段階」と捉えている。また、「日常性の中から人間の本質を把握しようとすることや、自己証明の當為が△内部√へと向かつているために、子どもの思考能力を越える高い抽象能力を与えられている点から見れば、子どもの論理を越えるような人物である」とウーフを捉えてもいる。この把握は、筆者の調査の結果からも裏付けられる。ただし、井上の関心は読み手の子どもにこの作品がどういう受け止め方をされるか、ということよりも、子どもの言語世界、精神世界が、どのように文学作品の中で結実するかにある

ため、ウーフを「絶えざる思索の中に遊び、探求するために行動する思索者と行動者の両面を持った存在」というかたちで肯定するにとどまってしまうている。

話を原点に戻そう。今回の調査で確かめようとしたのは、本作品が戦後日本の幼年童話の一つの成果である、多くの大人たちによつて支持されている理由が「子どもにこのように成長してもらいたい」という大人側の期待を担うものであったためではないか、ということである。「ぼくはぼくのできている」というウーフの自己確認のことには、大人にとつて、「あなたはあなたであつて、ほかのだれでもないのよ。あなたらしく、自分の人生を大切に生きてね」という切実なるメッセージと、やはり子ども自身に「ぼくはぼくなんだ」と認識させたい、ことばとして言ってもらいたい、という両方の思いが絡まっていると思う。その思いの強さによる子ども読者とのきしみを、先述の井上は「意図」を達成するために、登場するものすべてが収斂されすぎていて、提出した『問題』の回答以外については入りこみにくい」と指摘している。井上のいう「意図」とは恐らく筆者が問題提起しようとした「読まれ方の期待」<sup>11</sup>「読むことによつてよく成長してほしい」という幼年童話の手渡し手の願い、と置き換えてもよいだろう。

#### 〈まとめ〉

戦後日本の幼年童話のお手本のようにいわれてきた『くまの子ウーフ』、そこには、観念化された子ども像でなく、好奇心によつて万物にふれ、つまづき、考え、発見する子どものありようがポエ

ジーをもつて表現されている一方、そういう子どものありようが具体的に浮かび上がれば浮かび上がるほど、そうした行動原理を持ち合わせない子どもたちの側からは「理想化されたものがたり」と受けとめられる危険性もある。特に「ウーフはおしつこいでできるか?」の場合、好奇心↓ふれる↓つまづく↓考える↓発見する(わかる)の「わかる」を「からだでわかる」から「ことばでわかる」のレベルまでひきあげようとして、ストーリーの結末部分を展開させたため、大人の期待する読ませ方がどのようなものであるのか、垣間みえた気がする。

では、ウーフを凌ぐような幼年童話として、どのようなものがこれから待たれるのか。角野栄子は『おさるのジョージ』をひきあいに出しながら、「幼年童話のおもしろさは、四つ角を渡る時の気持ちに似ている」といつた。どっちに曲がると何が待ち受けているのか、わからない。いつも、いつも、その時の好奇心で決めていくものがたりのおもしろさのことをいつているのだと、私は理解した。このおもしろさに付け加え、大人による「よく読まれることへの期待」をはずし、読み終わるとそこがまた新しい四つ角の始まりになるような作品をイメージしている。ものがたりによつて、エネルギーが読み手に補給されるだけでなく、読みがものがたりに新しいエネルギーを補給してもいくような、そういう相互性のあるものがたりを期待したい。

かすかではあるが、子どもの創つたラスト部分のものがたりの中に、そういった読み手ものがたりのエネルギーシユな関係がほのみえたことを、今回の成果と考えている。

注

- ① 神沢利子作 井上洋介絵 『くまの子ウーフ』 ポプラ社 一九六九
- ② 神沢利子 『いたずらラッコのロッコ』 あかね書房 一九六八
- ③ 古俣裕介 『神沢利子』 『国文学』 解釈と鑑賞』 六十一巻四号 一九六、四八五頁～八十七頁
- ④ 神宮輝夫 『現代児童文学作家対談 6 いぬいとみこ・神沢利子・松谷みよ子』 偕成社 一九九〇 百八十九頁
- ⑤ 原 昌 『幼児の心性の息づく世界』 『日本児童文学』 一九七九、八 五十八頁～六十四頁
- ⑥ 杉原美香 『子どもが捉える子ども像—『くまの子ウーフ』における子どもの読みを通して—』 『広島文教女子大学紀要』 二十三巻 一九八八、十二 百三頁～百九頁
- ⑦ 松谷みよ子文 瀬川康男え 『いないいないばあ』 童心社 一九六七
- ⑧ 井上一郎 『子供の世界の表現論—『ウーフはおしっこでできてるか?』の拓く世界』 『国語表現研究』 3 一九八六、十二 九十九頁～百十頁
- ⑨ 村中李衣 『商品』としての幼年童話は』 『日本児童文学』 一九九九、一・二 十六頁～二十三頁参照